優　秀　―第一部門―

心のアルバムを開いて

兵庫県
清水紘子

私は現在、一種一級の視覚障害者である。左眼は僅(わず)かに光を感じる程度で、色や物の形は全く分からない。以前は弱視ではあったが見える世界を十七年間経験した。そのためか未だに母は「このきれいな花見てごらん」と言ったり、私自身も「このビンの中、もう空っぽかな」と言って思わずビンの中を覗(のぞ)き込んでみたりと、その姿は我ながら実に滑稽(こっけい)である。そんな私が家族をはじめ多くの方々と、そして大好きな音楽と共に歩んできた二十二年間を振り返ってみたい。

昭和五十二年、中学校の教師である父とピアノ教師である母の間に私は生まれた。兄についで女の

子の誕生ということで、みんな大変喜んだ。母は春には花で一杯になるようにと、色々な種類の種を蒔いたのだったが、花が咲く頃にはそれらに目を向ける余裕すらないなど、その時だれも想像しなかった。

母が私の眼の異常に気づいたのは生後三か月のことであった。物を見せても反応を示さなかったのである。病院での検査の結果は、眼の底に異常があり、見えるようになるかどうかは分からないということだった。その時の両親の気持ちは察するに余りある。発達段階からみてしばらく様子をみることになった。

絶望の日々がどれぐらい続いただろうか、その暗闇のどん底に一筋の光が差し込んだのである。その日は精密検査を受ける日だった。検査が終って結果待ちとなった。待っている両親の不安はどれ程のものだっただろうか。しかし、様々な検査を終えて出て来られた看護婦さんの表情が明るかったそうである。やがて、両親が呼ばれて診察室に入ると、先生が何やら機械を指差しながら説明して下さった。「ほら光を当てると反応しているでしょう。これは網膜が生きているという証拠なんですよ。決してよい視力とは言えませんが必ず両眼とも見えるようになりますよ」。両親はその時先生が『生き神様』のように見えたという。両親だけでなく祖父母も同じ気持ちだった。

やがて先生の予告通り、弱視ではあるが両眼とも見えるようになり、絵を描いたり外で遊んだりといった生活ができるようになった。その先生には今も何かとお世話になっているが、最初に私の眼と、家族の心に光を下さった、まさに神様のような存在である。

こうして、私の人生は視覚障害と共にスタートしたわけだが、その視覚障害と同様に、私の歩んできた道を語る上で、重要な位置を占めるのが音楽、特にピアノの存在である。このように書くと、きっと小さい頃から熱心に何時間も練習していたのだろうと思われるかも知れないが、残念ながらそうではない。母がピアノを弾いているのを見ると、その手を払いのけてよく邪魔をしていたそうだ。自分の練習はおろか、人の練習をも邪魔するような者が、音楽大学を卒業し、音楽のない生活は考えられないと言っても信憑性に欠けるが、まぎれもない事実なのである。音楽に対する気持ちや眼の状態は紆余曲折を経て現在に至っているわけだが、それぞれが私に与えたものはどのようなものだったのだろうか。

小学校一年生からピアノを習い始めたのだが一年もたたないうちに眼に変化が起こった。右眼が網膜剥離を起こしたのである。そして入院、全身麻酔をし、六時間半に及ぶ手術の後、二か月の入院をしたのである。その時右眼のことについては、まだ左眼が見えていたこともあってそれほどショックではなかった。それよりも七才の小さな体にこたえたのは治療の辛さであった。手術室から出てきた私は酸素マスクをつけ、点滴を続けながらまだ麻酔からも覚めず、顔面蒼白であったという。剥れた網膜を押えるためにシリコンを入れており、その効果を出すために麻酔から覚めるとすぐにうつ向きの姿勢にさせられた。一日、二十四時間うつ向きの姿勢が続くと、息が苦しくなったり体中が痛くなる。「大の大人でもこの辛さは我慢できないんですよ」という看護婦さんのお話。これだけでも私は疲

れ果てていたのだが、そこへ主治医は「眼が少し濁っているので眼のふちに注射をします」と言ったので、小さな私は腰を抜かしそうになった。記憶ではその注射は二回程あったと思う。こういったことが続いたためか、私の髪の毛は一か所だけ十円玉をあてて切り抜いたようにスッポリと抜けていたということを後日聞かされて驚いた。しかし、その時辛かったのは私だけではない、まわりはそれ以上辛かったにちがいない。退院の日「もう下を向かなくてもいいですよ」という主治医の言葉に大喜びしたものの気がつくと、また下を向いているという有様だった。その後もレーザー光線を当てたりと、あらゆる手を尽くしたがシリコンを抜く手術を最後に、小学校三年生の時、私の右眼は完全に失明した。

右眼が見えなくなったこともあり、ピアノはしばらく母に教えてもらっていたが、お互いに言いたいことを言いあってあまりはかどらなかったため、小学校四年生の後半から今もお世話になっている先生に師事することになった。その先生のレッスンを重ねていく中で、音楽の奥の深さ、それをピアノで表現することの難しさと同時にすばらしさを教えて頂いたのである。中学生の時のレッスンで、一つの和音の音の出し方について、細かく指導をして下さった。何度弾いても「違う」と言われ、家に帰ってからもいろいろな弾き方をして、いろいろな音を出してみた。それでも「違う」と言われ、また試行錯誤を重ねるという日々が続いたが、ある日のレッスンの時、「そうよ、その音よ」と言って下さったのである。その頃から音楽とは実に難しいものであるが、楽譜に書かれている音符を鍵盤(けんばん)上で

命あるものに変えていくことへの喜びを感じ始め、是非、音楽の道に進みたいと思うようになったのである。

一方、学校生活はというと小さな字が見えなかったため、家族や先生方の協力を得て教科書も試験問題も、かなりの大きさまで拡大してもらったり資料を読んでもらったりした。勉強方法ひとつをとっても、いかに多くの人々の温かさによって成り立っているかが分かる。

左眼の視力を失うまでに、私にとってもう一つ大きな出来事があった。それは中学二年生の夏休みに、見えなくなった右眼の摘出手術をした時のことである。お医者様の勧めもあったし、私自身もまぶたが下がったような感じになるので、取ってしまった方がよいと思い決断したのだったが、やはり手術までいろいろな迷いがあった。勿論、手術に対する不安もあったが、先に述べたような小学校一年生の時の苦しみを思い出し、複雑な思いにかられたのであった。そんな時、父が同じ病院内で片足のない人が車椅子（いす）に乗っていたということを教えてくれた。私のように眼球を摘出する者や足を切断する人など、病院にはほんとうにいろいろな苦しみを抱えて入院している人達がいる。私はこれまでに何度も入院したが眼科病棟だけでも、ある朝、突然両眼が見えなくなった人や、まぶたに癌のある人など多くの人に出会った。

人は苦しい立場に立たされた時、どうしても自分だけが不幸なんだと思いがちだが、そうではない。病院内だけでなく、道ですれちがった人全てが、多かれ少なかれ何らかの苦しみを背負いながら生き

ているのではないだろうか。右眼の摘出手術の入院で私は考えた。失ったものに対していつまでも固執することは自分の道を自分で閉ざすことではないかと。

高校に入学してからは、音楽の道を目指してひたすら練習に励んだ。しかし、その頃ピアノを弾きたい、また、弾かなければならないという思いはあったが、ピアノを弾くことができるという平穏な毎日に感謝をしたことがあっただろうか。ピアノのことだけでなく普段の生活そのものの有難さを身に染みて感じさせられたのが、高校二年生の一月に起こった阪神・淡路大震災であった。どれほど悲惨だったかはここで改めて述べるまでもないだろう。私の家も住めなくなり、近くの祖父母の家に避難していた。地震直後は当然ピアノどころではなかったが、日がたつにつれまわりも少しずつ落ち着きを取り戻し、ほかの家からもちらほらとピアノの音が聞こえるようになってきた。私も練習したいと思ったが祖父母の家にはピアノがなかったため、高校の音楽室を借りて練習させて頂く日が続いた。

ところが四月に入り、高校三年生の始業式の二日前、私の最も恐れていたことが起こった。その日の午前中は震災後、初めてのレッスンに行き、午後からは住めなくなった家の解体作業を見に行っていた。十七年間住んだ家が完全に取り壊されるのを見届けた直後、私の貴重な左眼も音を立てて崩れたのである。左眼の異変に気づいた時は少し疲れているのかと思い、横になっていたがその状態は良くなるどころか悪化する一方だった。しかし、その状態を自分の口から家族に告げることが恐ろしかった。本を開いても、何一つ字を読むことができない。眼に映るものは全て、グチャグチャでその不気

味な光景を前にして、私は全身の血の気が引いていくのを感じた。ついにきた!! しかし、あまりにも早すぎる。夜遅くになって母にその状態を言うことができたが、見えなくなるという恐怖と小学校一年生の時の治療の辛さが蘇り、震えと涙が止まらなかった。翌日、お医者様の自宅に電話をしたが、その時は既に真暗な状態で、押し潰されそうな圧迫感で気が変になりそうになったことを覚えている。黒い幕が垂れ下がったまま、高校三年生の始業式の朝を迎え一歩一歩と歩くことにさえ恐怖を感じ、深々と溜息をつきながら重い足取りで、学校ではなく病院へと向かった。

検査の結果、網膜は完全に剥れ浮いた状態だったという。緊急入院、緊急手術となりその手術も網膜を剥そうとする余計な神経の除去や、剥れた網膜をレーザー光線で焼き、更に特殊なガスを入れて押えつけ、もうこれ以上はさわることができないというギリギリの線まで手術は行われたという。再びうつ向きの姿勢が一か月近く続いた。日中は検査の度に呼びに来る主治医の声にびくびくし、夜は一定の姿勢ゆえの辛さで眠れず、まばたきをするだけで飛び上がるような眼の痛みと、先行きを不安に思う心の痛みで、小学校一年生の時の入院とはまた違った辛さがそこにはあった。それは、やはり七才と十七才という年齢の差であろうか。お医者様が最善を尽くして下さったこともあり、一か月後に物の形がうっすらと見えるまでに回復した。しかし、このまま収まるはずがないと私は心のどこかに感じていたのである。

退院後、家で少し休んでから学校に行きはじめた。もう拡大した教科書を読むことも、字を書くこ

とも出来ない。小学生の時、二年間だけ通った盲学校で教わった点字を記憶の奥底から引っ張り出し、先生の話を聞きながら慣れない点字を打ち、なんとか授業についていこうと必死だった。学校に行きはじめて二週間後に音大入試の課題曲の発表があった。このままの状態でピアノを続けていくことができるだろうかと考えたが、これまでずっと続けてきたピアノをここで止めてしまうわけにはいかない。私は音楽への道を文字通り手探りで歩きはじめたのである。

入院する以前と同様、学校で練習させて頂く日々が続いた。今まで弾いたことのない曲は楽譜を見ることができなくなったため、母に片手ずつ音を教えてもらい、それを頭にたたき込んだのである。そして、その曲を弾き込んでいく段階で私は大きな壁にぶつかった。物の形がうっすら映るとはいえ、鍵盤などの細かい物は見えるはずがなく、その状態でピアノを弾くことの難しさを初めて知ったのである。同時に見える時には気づかなかった視覚の果たしている役割の大きさにも気づいた。今まで何とも思わなかったところまで、音をはずすようになったり、今、自分がどの鍵盤の音を押えているのか分からなくなるなど、ピアノはどんどん私に問題を投げかけてきた。しかし、どんなに悩んでも私には耳と手の感覚しか頼るものはなく、とにかくその状態でピアノを弾くことに慣れるより他なかった。そして、もうひとつ練習時間の問題があった。学校での練習と、親切にも一般の家庭のピアノを貸して下さる方があり、そこでも練習させて頂いたのだがそれでも時間が足りなかった。祖母は悩んでいる私を見て、なんと、何十年となく使ってきたたんすを三つも捨て、そこへ倉庫に預けてあるピアノ

を入れるという思い切った案を出したのである。私が「でも……」と言いかけた次の瞬間から、祖母は次の行動に移っていたのである。しかし、そのお陰でゆっくりと腰を落ち着けて練習ができる状態になった。それが七月の下旬だったろうか、八月は一番練習できる期間だと意気込んでいた私の前に、これでもかとばかりに再び大きな障害物が立ちはだかった。

四月に手術した左眼に茶色の太い筋が斜めに走っているではないか、診察していただくと網膜にしわがよっているということで、再入院を余儀なくされた。全身に寒気が走るような鈍い痛みを伴うレーザー光線の治療だった。手術はしなかったため二週間で退院できたのだが、入試を目前に控えた私にとって、ピアノを弾くことのできない二週間がどれ程長かったことか。その二週間の空白を埋めるべく、私は必死に練習した。入試の二、三週間前、今まで物の形がうっすらと映っていたのだが、それがだんだんもやがかかったように、見えなくなっていくのが手に取るように分かった。辛かったが歯を食いしばってその現実を受け入れるよりほかなかった。思い返せば生後三か月の時、全く見えないだろうと絶望の日々を送っていたあの頃からすると、見える世界に生きた十七年間は、奇跡の十七年と言っても過言ではないだろう。

阪神淡路大震災に始まったあの激動の年から五年、今年の春、音楽大学を卒業した今、苦しかったがあの時諦めずにピアノを続けていて本当に良かったとつくづく思う。志を同じくする友人との出会い、また実技を中心に理論や歴史など、音楽を様々な角度から勉強できたことは財産であり、また、そ

れを生かしていくことが今後の私の課題である。

音楽大学の学生の時、中学校で英語を教えて頂いた先生が、中学生を対象とした講演の講師として、私を招いて下さったことがある。それがきっかけで学生の時、何度か講演をさせて頂いた。初めての経験で最初は戸惑ったが、講演会を通してたくさんの生徒さんや先生方と出会えたことが大変嬉しかった。また、講演の感想文を頂いた時には、私のこれまでの経験とピアノ演奏で、生徒のみなさんがこんなにいろいろなことを感じて下さったのかと、喜びと共に驚きさえ感じた。私はこれまで家族は勿論のこと、ほんとうにたくさんの方々の温かい支えがあって生きてこられた。今後は自分自身の経験とピアノを通して、何か少しでもお役に立てることがあればと考えている。

また、大学卒業後、友人の伴奏を通して出会ったある声楽の先生が、伴奏者として活動することを勧めて下さった。一人で演奏する時とは違い、声楽の方の呼吸を感じながら合わせるという難しさもあるが、共に音楽を作り上げていくという楽しさも同時に存在する。人を圧倒するような高度な技術は持っていないが、一人で演奏する時も伴奏する時も人の心に触れる、そんな演奏ができるように努力していきたい。

見える世界と見えない世界の両方を経験し、初めて視覚の持つ役割の大きさに気づいたと先に記したが、それはピアノに限らず生活のあらゆる面に感じたのである。料理をすることもその一つであった。煮物の火の通り具合は煮える音でだんだん分かるようになってきた。野菜炒めも野菜が柔らかく

なる感じが、フライがえしを通して手に伝わってくるようになった。しかし、初歩的と思われる卵焼きがなんとかできるようになるまでには、随分日数を要した。毎朝続けるうちに感覚で焼くことに少しずつ慣れてきた。その労苦の結実は父のお弁当箱の一隅を彩っている。

いつだったかラジオで「中途失明者は、あらゆることがゼロからのスタートである」ということを言っていた。私自身、実際に経験してみて正にその通りだと思う。私にはまだこれから解決していかなければならない問題がたくさんあるが、慌てず、焦らず、ゆっくりと根気よく視覚障害と向き合っていきたい。

自分にとって苦しいことは、そのままにしておくと、そこには、まるで引力が働いているかのように、どんどん悪い方向に落ちていく。良い方向へ導くためには想像を絶するエネルギーと時間、多くの方々の支えが必要である。そして最後は自分の判断により、自分の手で道を切り開いていかなければならない。何も肩を怒らす必要はないが、生きるとはそのようなものではないだろうか。少なくとも今までの経験からそう思うのである。視覚障害は私や家族を随分苦しめたこともあったが、同時にいろいろなことを教えてくれた存在でもある。視覚障害があったからこそ、机上の勉強だけでは学ぶことのできないものを会得できたように思う。その中で私が、人として大切だと考えていることのひとつについてふれてみたい。

それは『人の痛みの分かる、温かい心を持つ』ことだと考えている。当然のことのようでありなが

ら、今の世の中に欠けていることではあるまいか。一口に痛みの分かる、温かい心といっても、難しく奥の深いものではないだろうか。なぜなら人の痛みはそう簡単には分からないものだと思うからである。

ある日、駅で「大丈夫ですか」と声をかけてくれた人がいた。その人自身、交通事故で重傷を負い何か月も仕事が出来ないと嘆いていた。そして、「自分がこうなってみて初めて体の不自由な人の大変さが分かった。分かってるようでも、自分がなってみんと分からんもんやなあ……」と、しみじみ語ってくれた。人の痛みが分かるためには、自分もその人と同じような状態にならなければ分からない、というのが本当のところだろう。私の経験を通して感じた正直な思いでもある。ところで、温かい心、とは一体何だろう。そう、温かい心とは、人の気持ちを理解しようと努力するその姿勢にあるのではないかと私は考えている。百パーセント相手の気持ちを理解することは難しくても、努力することで、限りなく近づくことができるのではないだろうか。私には人の気持ちが分かるという単なる思い込みではなく、真の温かさを持った人が増えてくれることを願う。私もそうなれるよう心掛けていきたい。

様々なことが脱兎(だっと)のごとく駆け抜けていった二十二年間だった。家族やまわりの人達の温かさ、情熱を注ぐことのできる音楽があったことなど、一つ一つに感謝しながら歩んでいきたい。そして、これから遭遇するであろう様々なことに、自分なりの色をつけ、心のアルバムに刻んでいきたい。また、それら一つ一つに生きる価値を見い出していくことができれば最高であると考えている。

清水紘子

昭和五十二年生まれ　兵庫県神戸市在住

選評

二十二歳のあなたが、人生で最も大切と思われることを、正確に体得され、見事に表現されていることに、深く感動いたしました。十七年にわたる視覚を失う恐怖は、身に沁みるように感じられましたが、幸い音楽の才能に恵まれていたことで、人生が明るい方向にあることは嬉しいことです。これから、結婚、子育てと人生はまだいろいろなことがあると思いますが、あなたはすべてのことに深く想いをいたし、稔り豊かな人生を築かれることでしょう。

（羽田　澄子）